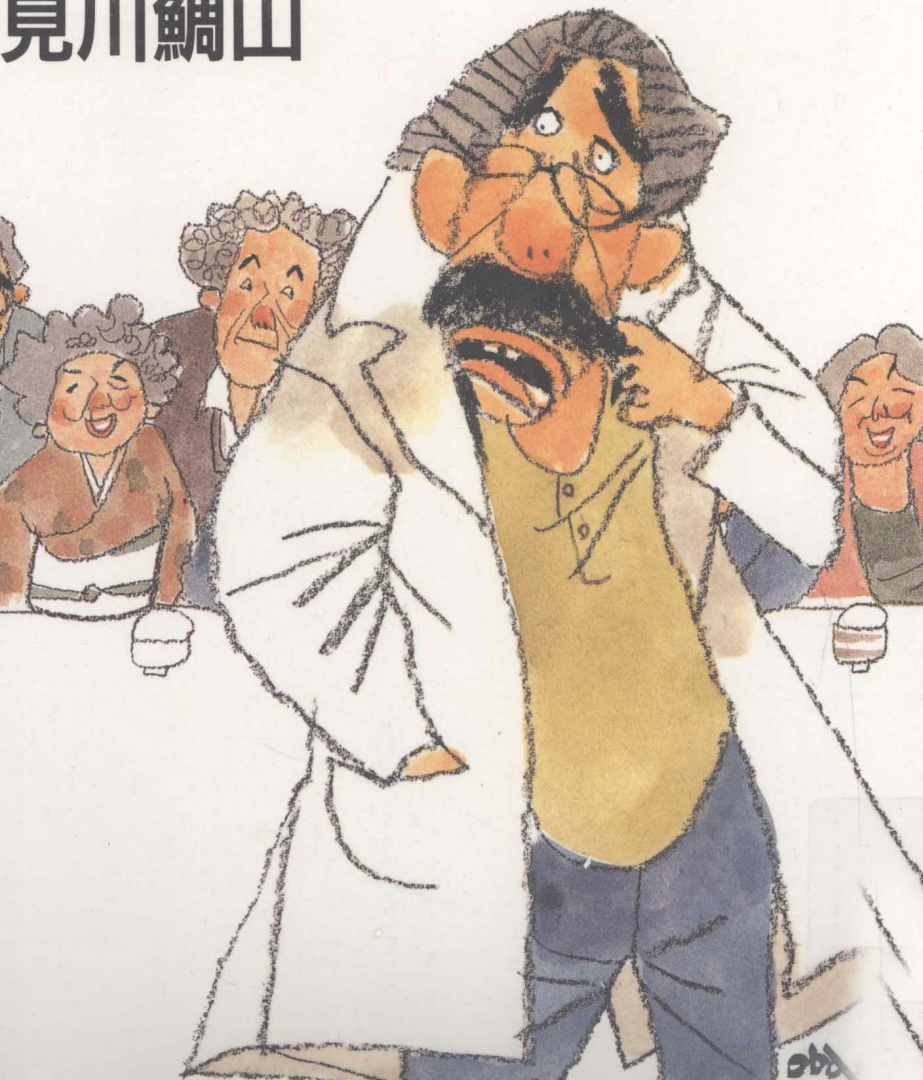
山医者がんばる

見川鯛山



山医者がんばる

見川鯛山

毎日新聞社

著者略歴

本名見川泰山。大正五年，栃木県安蘇郡植野村に生れる。植野小学校，県立佐野中学校の少年期をフナ釣りと目白とりに熱中しておくる。

先祖代々が医者で，その十八代目。祖先に，聖医，名医続出せるも，十六代泰雲，十七代泰蔵にて名門のホマレを終り，十八代泰山はついに“山医者”へと零落す。数少ない博士でない医者のなかの一人。

ただし，狩猟，木登り，アユ釣りは鬼才。

栃木県那須高原の住人。

山医者（やまいしゃ）がんばる

一九八八年一一月二五日　第一刷
一九九三年　六　月二五日　第四刷

著　者　見川鯛山
編集人　吉田俊平
発行人　田中正延
発行所　毎日新聞社

〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇-五一　大阪市北区梅田
〒八〇〇-二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　正文社

落丁・乱丁の本は、小社でおとりかえします

© TAIZAN MIKAWA Printed in Japan 1988

ISBN4-620-10375-6

山医者がんばる　目次

いつもの家　九
写　真　一五
毎朝一分値百円　二
炭　竈（上）　二五
炭　竈（下）　三〇
イ　イ　人　三五
タヌキの皮　四一
縁　側　四六
春いちばん　五二
まんじゅマンジュウ　五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ノッペラボウ　六三
蜘蛛の巣　六九
暑い日　七四
活劇　八〇
展望台　八五
茄子の馬　九一
シッポの骨　九六
風　一〇二
ミジンコ　一〇八
春うらら（上）　一二七

春うらら（下）　一三三
カマキリ　一三八
危機いっぱつ　一四三
罠　一四八
かし子　一五三
黒揚羽　一五九
さむい風　一六四
オッパイ　一六九
煮しめ　一七五
星へ行ってきた婆さま　一八〇

マリリン・ロンモー（上）　二〇〇
マリリン・ロンモー（下）　二〇六
霧がくれ　二二
鬼才　二八
あとがき　二三

装画　おおば比呂司
挿画　鷹端晩生

山医者がんばる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

いつもの家

ふんどし一本の、大入道の夏の神様は、ことしついに那須高原へ現われなかった。

遙か遠い平野の空へ突っ立って、精いっぱい力んで力瘤を見せびらかし、或る時は雷神と組んで大暴れしてるようであったが、ここからは寝呆けた蛍光灯みたいにポアーッと明るくなるだけで、忘れたころにゴロゴロと、猫がノドを鳴らすほどの音であった。

山里では三十五度の猛暑が続いたというが、高原は寒い夏だった。

冷たい雨と霧がじめじめと大地を濡らして、森も林も紅葉の秋を待てず、もうしなだれた病葉になった。

ほんの幾日か、そこでカナカナが啼いてくれたが、悲しげに啼いて死んだ。

私は夏が見たくなって何度も山を下りていった。山麓は夏のさかりだった。ゆたかに稲田が光り、草はらはむせかえる草いきれであった。私はランニングとサルマタでそこへ寝ころび、麦藁

帽子を顔へのっけて、大の字に手足をさらした。
顔の真上に太陽がある。でも、チカチカと帽子を透かして、点になった光である。
もう汗が流れだしていた。
その時、誰かきて、顔の上で云った。
「やっぱりセンセか。オレ、誰か死んでるんかと思った」
私は手だけ動かしてみせて、生きてると教えた。
「こうだ暑いとこで、モノ好きによ……。帰りに寄ってげ、清水で西瓜冷えてらぁ」
私はまた手のひらで合図を送り、そのままでいた。
男が刈り草を山もりに背負って去っていった。いっそう強い草の匂いを残していったのでそれがわかる。男がすぐそこの正平であることもわかる。脳天から出すような頓狂な声でわかる。
ジリジリと体が焦げていた。小気味よい嗜虐な熱さであった。もの音のしない草原である。いちどキシキシと、耳もとからバッタが飛び立っていったが……。
暫くして私は正平の家へ行った。
油照りの外から土間へ入ると、何も見えない向うで正平が云った。
「ホレ、足もとに猫が寝てるぞ。踏んづけて引っかかれんなッ。もっと右さ寄れ」
で、そうした。目が馴れると、正平は黒光りする板の間へ越中ふんどしで胡座をかいていて、

俎板にはもう大きな西瓜がのせてあった。
正平が四つに切って、ひとつくれた。しみるほど冷たい西瓜だった。
正平は顔を押しこんで種子ごと食った。
「種子かあ？　面倒臭ぇやな。どうせ、あしたソックリ出ちまうわい」
鼻の頭へ種子を乗っけて正平が笑った。カミさんは留守だった。ホテルの下働きにいって夜まで帰らないのだそうだ。
だから憚らず云った。
「センセ、また会津さ行ぐべや。オレ、娘にも母ちゃんにも逢いたくなった。いま伊南川で鮎釣れてるんだ。オレ、あしたから行って釣ってる。うめえ具合にホテルから十キロ注文きてるだ。団体へぇるだとさ。オレ、いつもの家さ泊ってる。あとから来ォよ、どうせヒマだべ？」
「馬鹿こけッ、忙しい真っ最中だ!!」
私も西瓜から顔を出して云った。
私がひと切れ食ううちに正平はふた切れ食った。残りのいちばん大きいのは戸棚へしまった。カミさんのぶんだった。
何年か前、私は正平の〝いつもの家〟へ泊ったことがある。八十の婆さまと、死んだ息子の嫁と、その女と正平のかくし子がそこにいる。

百姓の正平は川漁師でもあり、冬は無尽蔵の篠原の竹を切って編む笊屋でもある。だから年に何度も会津へ行く。とくに真冬は、定宿の旅籠へ泊りながら、雪深い会津の村むらを歩き、〝笊屋の正平さん〟で親しまれていた。

そしてセッと知り合った。色の黒い小柄な女で、姑の面倒をみながら小まめに働く農婦だった。セッは十九で嫁にきた。そしてもうその年に、夫は北海道の炭坑へ出稼ぎに行って、落盤に潰され、白い箱に入って帰ってきた。

姑は、子もないのだから実家へ帰って、もういちど嫁に行けと云ったが、セッは帰らなかった。そしてずうっと若後家の農婦だった。

正平はせっせとセッの家へ行き、やがて亭主のように居ついた。

世間でトヤカク云ったが頓着しなかった。そして私に云っていた。

「どうせ旅籠さ払うゼニだぁな、あそこへ泊りぁ、人助けだ。婆さまは弱えし、女の一人百姓じゃ、大変だい。それに、嫁さんだってハア、女ざかりだしよ……」

そして間もなく、セッは正平の子を生んだのだった。

正平は悪びれもなく釣り仲間に云ってる。

「赤んぼはアユって名にしただ。だから都合いいぞ。カカァにぁ、伊南川のアユんとこさ行ぐって云って、トラックさ七つ道具だの釣り竿つんでよ、オレの竿もズボンの中さしまってよ……。

誰よりも、アユの母ちゃんがアソコ濡らして待ってるだもな、へへへへッ」

私が正平の〝いつもの家〟へ行った時、アユは四つだった。祖母に似た色の白い女の子だった。

背戸の柿の木でアブラ蟬が啼きだした。ジリジリと熱い声である。

正平の鼻の西瓜の種子がかわいて、いまにも落ちそうだった。

でも、構わずに云った。

「この頃は向うから云ってくらぁ。囮も元気に生かしてあるし、川の水の具合も、ワタシの水も、どっちもいい按配だから早く来ォって。会津の女は情がふけぇだ。センセも一人めっけるか、へへへへ……」

と、鼻へシワよせて、ポロッと種子を落した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com